

ワークショップ報告書

Contemporary Topics in Industrial Organization and International Trade

仙 波 憲 一

2016年10月29日(土)30日(日)に、国際政治経済学部並びに国際研究センター主催の国際ワークショップを開催した。タイトルは、“Contemporary Topics in Industrial Organization and International Trade”であった。

本ワークショップの趣旨は以下である。国際間の経済取引が発展し、経済のグローバル化が進み、IoT、AI等の発展により、急激に変容する経済取引形態、それに伴う取引環境に対して産業構造や市場形態、さらに企業行動はどう変化していくのか。この問題意識に基づき、理論分析の視点を中心に多様な経済問題の討論を目的に開催された。

本ワークショップは7つのセッションからなるので、各セッションの討論について以下報告する。

第1セッションはEden Yu氏からの発題であった。これに基づき以下の議論がなされた。ここ半世紀のアメリカの研究機関の研究成果としての論文数が群を抜いていること。それはアメリカの経済成長に負うところが多く、経済成長が研究成果に対して正の相関を持っているとの興味ある指摘がなされ、活発な議論が交わされた。

第2セッションはChi-Chur Chao氏からの発題であった。最近顕著にみられるメディカルツーリズム(MT)の経済効果について議論がなされた。MTが増えると、ホスト国内の賃金格差が高くなり、結果として一国の総生産性が下がり、厚生水準の低下をもたらす経済効果があることが指摘された。MTによるクラウディングアウト効果が議論され、ツーリズムに関して新たな視点が与えられた。

第3セッションはWen-Jung Liang氏からの発題であった。2企業の市場競争において、1企業のみがR&Dを導入した時、価格競争の方が数量競争のケースと比べより高い経済厚生がえられる。他方両企業に導入された場合、輸送コストの大小によって、競争形態による経済厚生に違いが出ることが示された。今日R&D競争がますます激化す

る市場経済において、R&D と経済厚生に関する新たな視点から活発な議論がなされた。

第4セッションは Matsumura Toshihiro 氏からの発題で、企業の環境政策と CSR 活動との関連について議論がなされた。共同利潤極大化を行う産業に、環境型社会的責任 (ECSR) を取り入れた場合、ECSR は共謀手段になる。他方、価格競争下での産業では、個別企業が ECSR を取り入れると結果的に産業レベルで高い ECSR が取り入れられることになる等が議論された。極めて今日的テーマであった。

第5セッションは Bihong Huang 氏からの発題であった。確定給付型年金 (DB) 計画を持つ企業の資産選択の投資行動に関する議論がなされた。特に高い DB 計画を持つ企業ほど、国外での水平的合併により資産形成をする傾向がみられることが示された。年金問題は特に高齢化社会を迎える時代であり、直面する企業の投資行動について活発な議論がなされ有意義であった。

第6セッションは Hiroshi Ohta 氏からの発題で、迂回生産過程のマクロー一般均衡モデルについて検討がなされた。特に、そのモデルでは2つの生産効果 (MOP と RAP) がキーワードとなることが示された。また所与の資源賦存量のもと、発展段階に応じて異なる最適資源配分が存在しうること等が提示された。議論を通じて新たな知見が得られた。

2日目は、第7セッションとして、前日の各セッションの様々な議論の総括がなされた。

以上の各議論は企業や国民経済が直面する今日的経済課題や我々が日常的に携わる経済問題に連結するもので、喫緊の研究課題である。参加者の問題意識の高さの下、重要なテーマに関して活発な議論がなされたことを報告するとともに、参加者に対して御礼を申し上げたい。

この議論を通じて参加者が現代経済の喫緊課題について理解を深め、さらなる議論の発展につながる機会になったなら、当ワークショップの開催意義は達成されたものと考ええる。

本報告書は当日の議論をもとにまとめたものであり、今後さらなる発展を期待するものである。また、当ワークショップが開催できたのは、国際政治経済学部並びに国際研究センターの支援のもとであることを最後に記し、厚く御礼を申し上げる次第である。